

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和元年度 第1号 2019年9月30日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和元年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2019年8月27日～9月1日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回る。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は、恵山～鹿部沖。
- ・ 魚群反応の比較的強い深度は、水深250m前後。
- ・ 漁獲物は、苫小牧沖の水深250m付近及び恵山沖の水深350m付近では成魚が主体だったものの、登別沖の水深250m付近では未成魚が主体であった。
- ・ 水温は、水深200～300mにかけて平年よりもやや低い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の185、189、193漁区（恵山～鹿部沖）に強い魚群反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を上回ったものの、高い反応量が得られた2009～2011年度と比べると低い水準となっており、2016及び2017年度と同程度の値となっていました（図3）。
3. 魚群反応は、主に水深150m以深に観察されました。特に水深250m前後には比較的強い反応がみられました（図2・4）。
4. トロール調査の結果、漁獲物の体長組成は、苫小牧沖の水深250m付近では、尾叉長40～50cm前後のスケトウダラ成魚が主体となっていました。登別沖の水深250m付近では、尾叉長10cm前後及び20cm前後の未成魚が主体となっていました。また、恵山沖の水深350m付近では、尾叉長35～40cmの成魚（未成魚も混じる）が主体となっていました（図5；なお、トロール地点は図1右上図参照）。
5. 調査海域の水温は、南茅部沖（Dライン沖観測点）および登別沖（Hライン沖観測点）ともに、水深200～300m付近にかけて平年（2002年度以降の平均値）よりも1℃前後低くなっていました。スケトウダラ成魚の生息に好適とされる5℃以下の水温は、両地点ともおよそ水深180m以深となっていました（図6）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11月）の状態を予測するために実施しているものです。12月以降の状況は、11月下旬に実施する分布調査（2次調査）により予測する予定です。調査終了後にスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

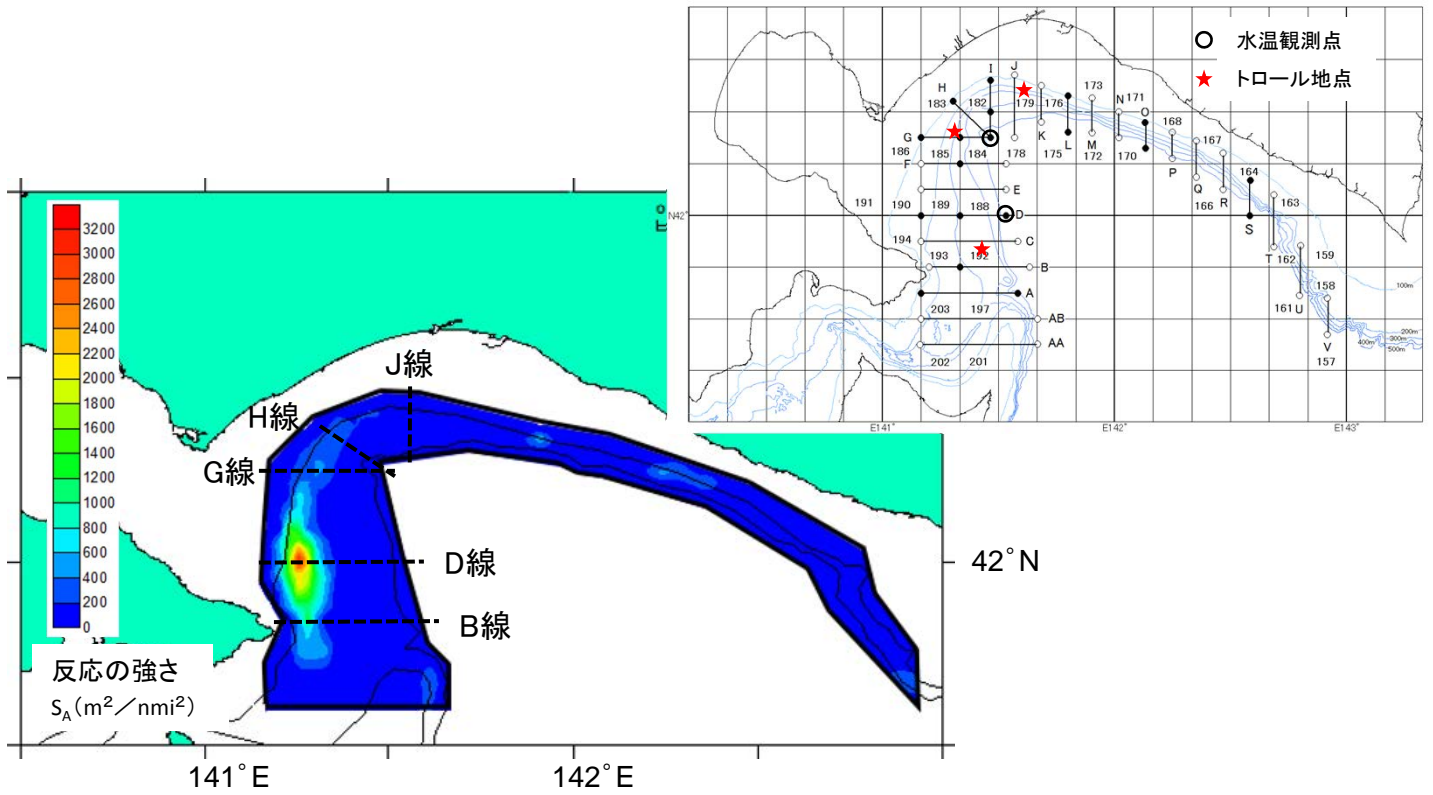


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

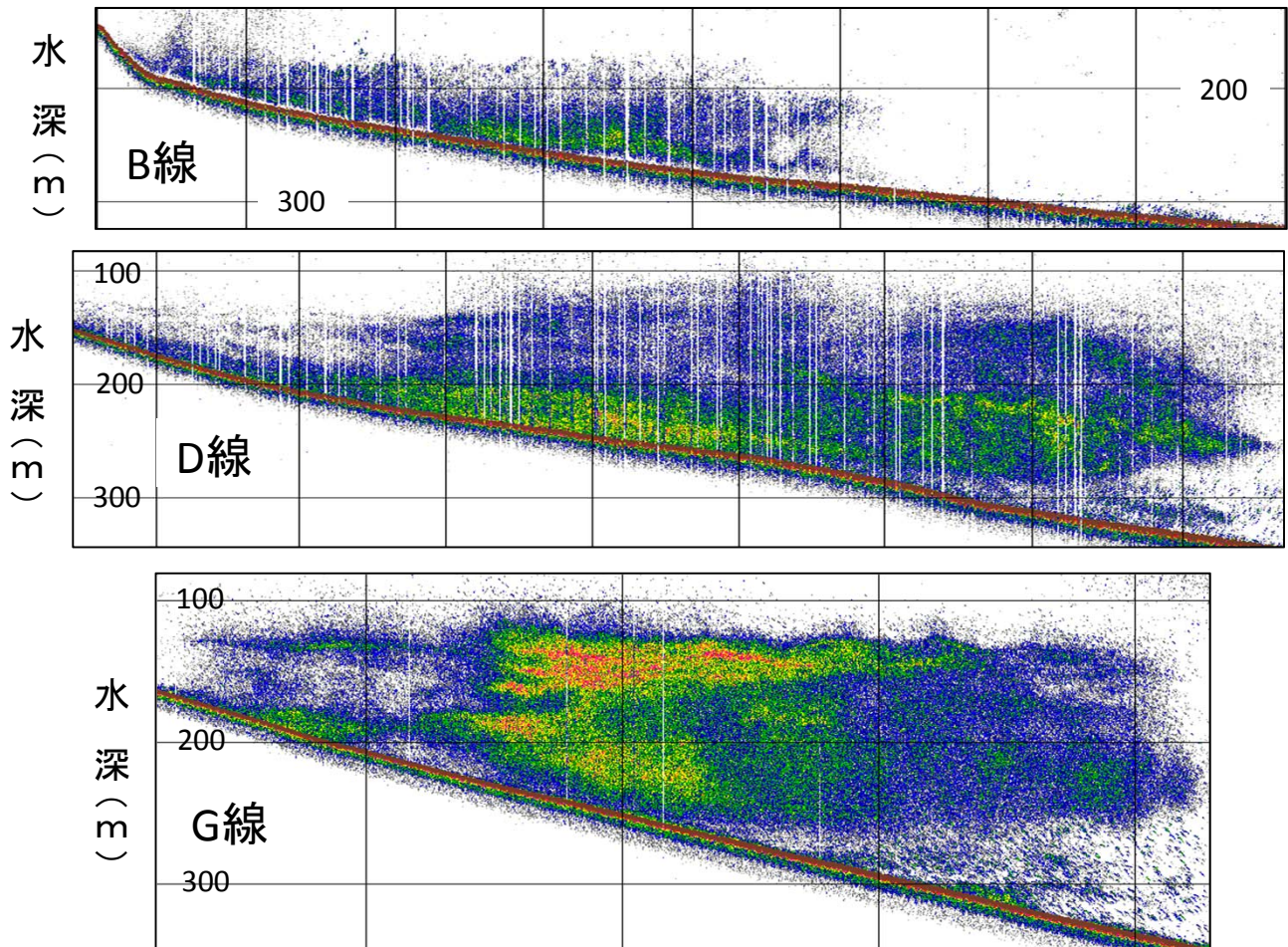


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

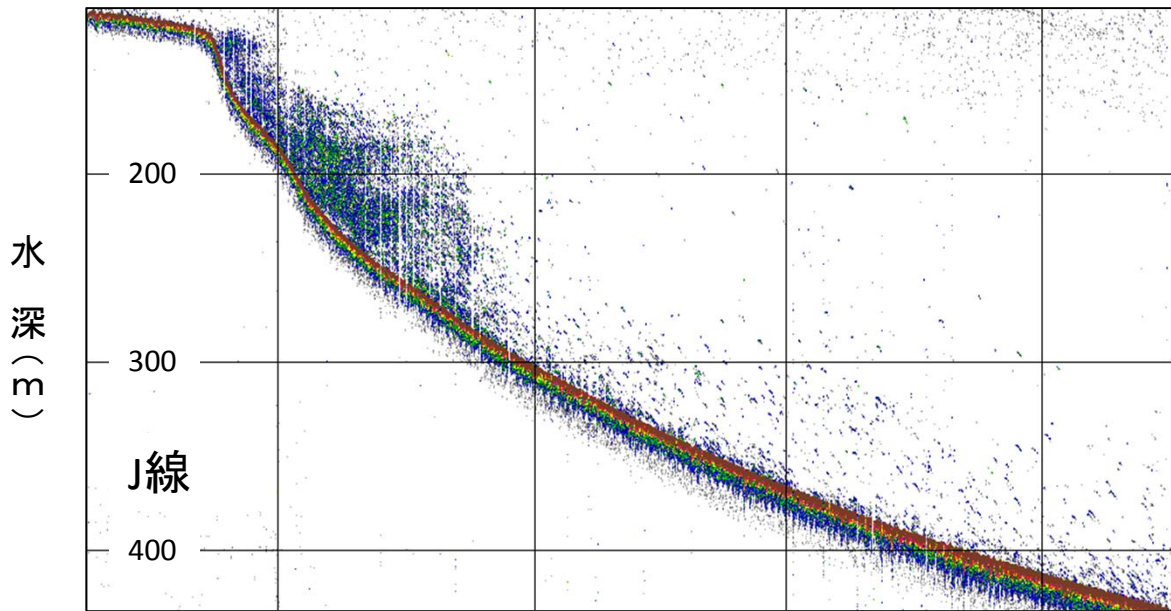
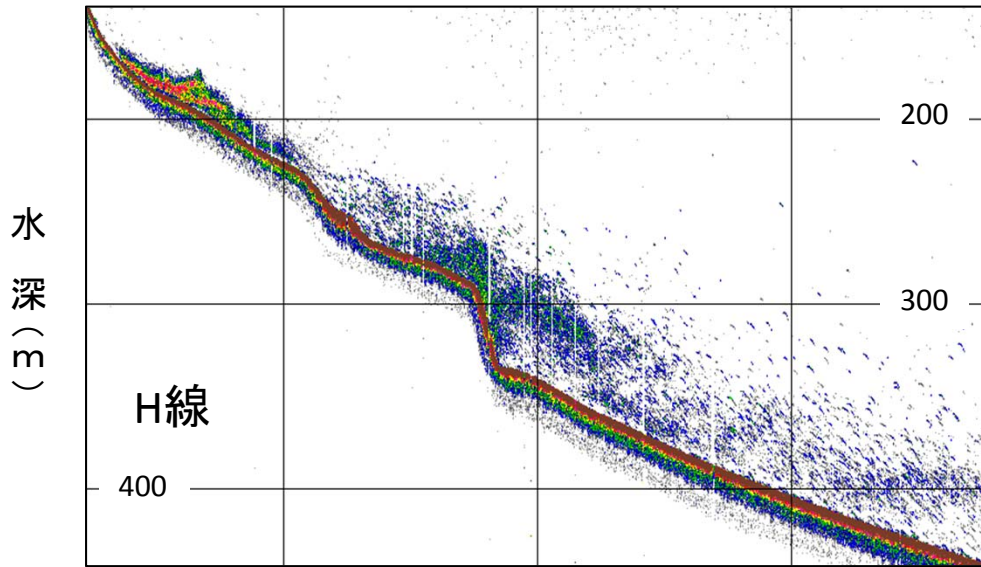


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

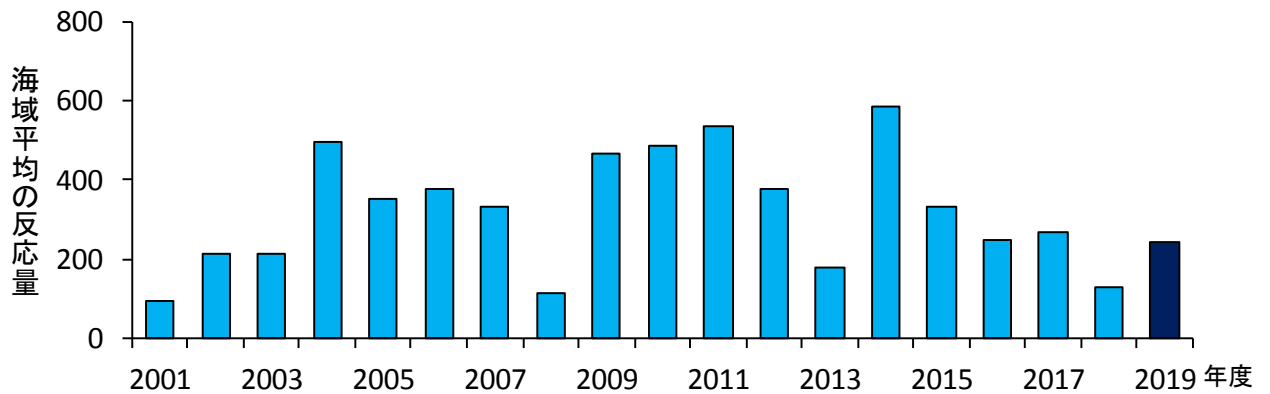


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

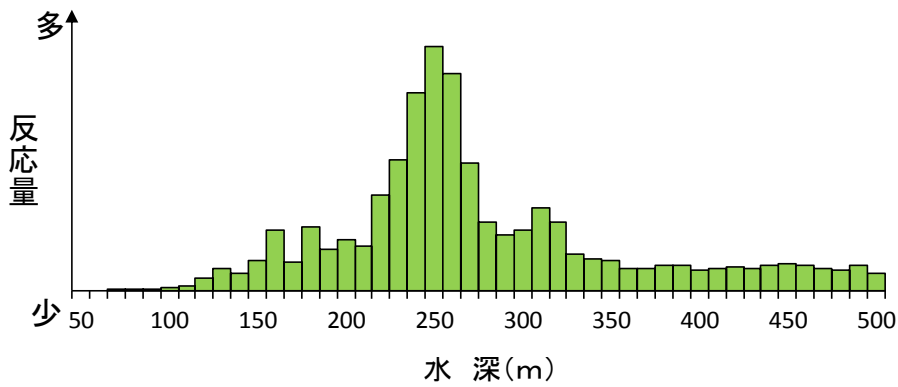


図4 水深別の魚探反応量

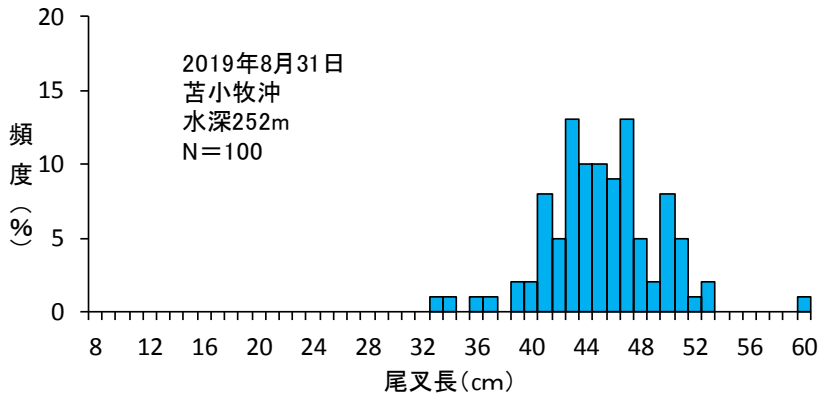
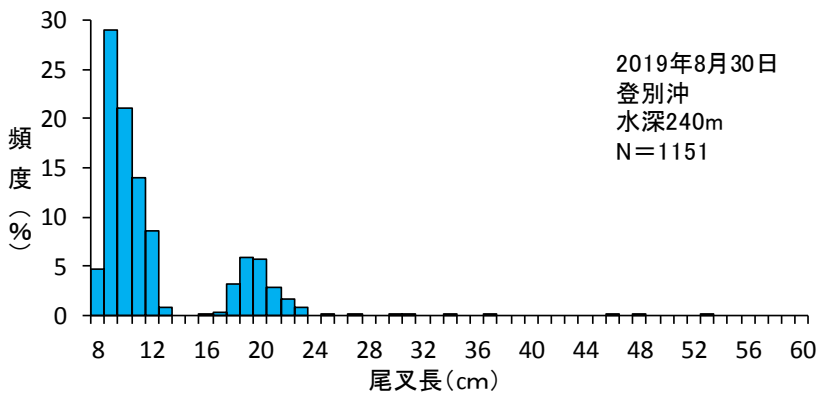
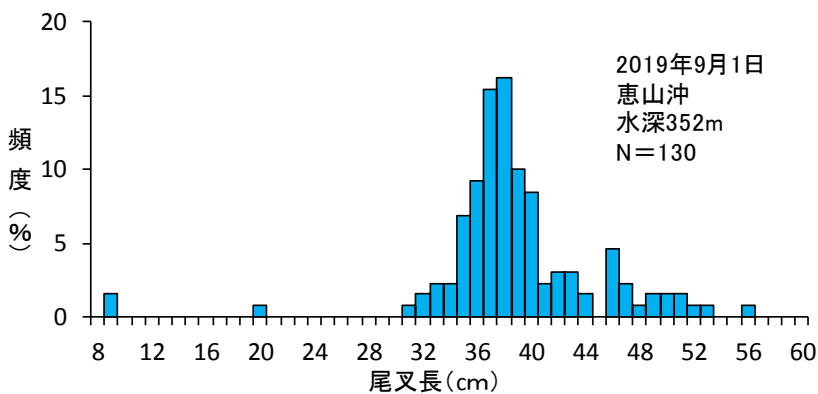


図5 漁獲物の体長組成

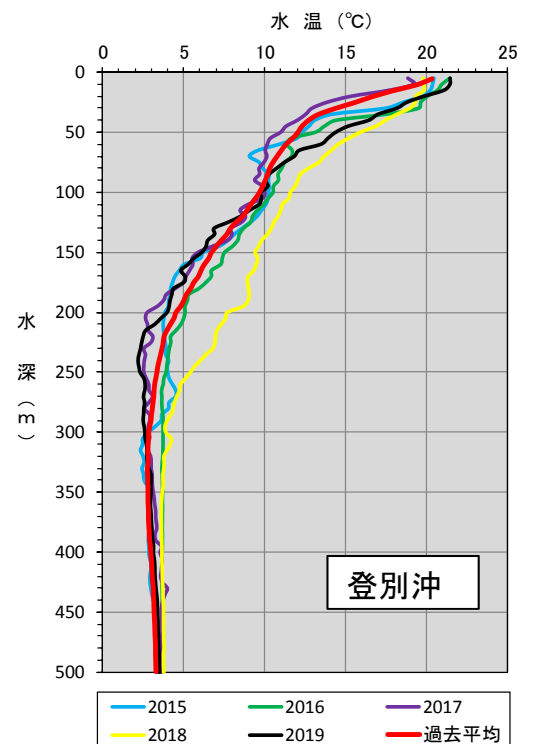
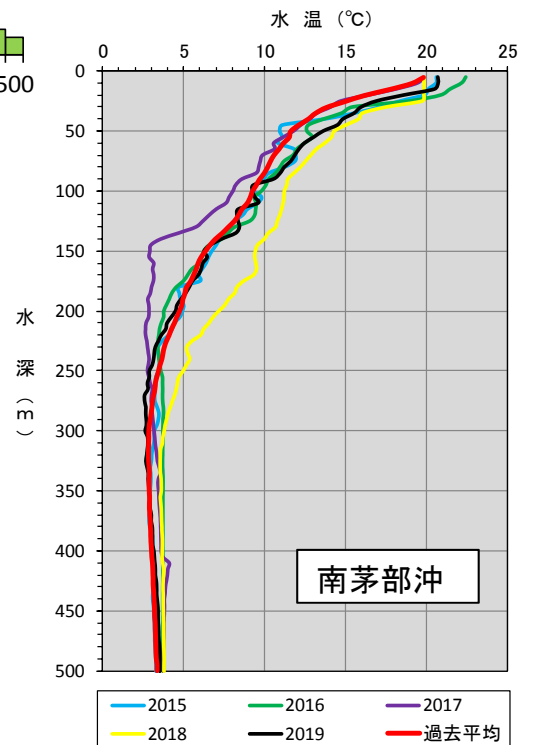


図6 8月下旬における水温の鉛直分布 (過去平均:本調査における2002~2018年度の各調査点の平均値)